《見方・捉え方〔32〕》　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　令和５年１０月２日

評価「B」の意義

《観点別評価》

◇　平成３０年告示の高等学校学習指導要領が実施されて少し経過していますが，もともと高校にも適用されていた観点別評価が，不充分な浸透度であったものが今回から本格的な実施が求められるということで，学校現場は準備に追われてきていました。

　長年にわたって慣れ親しんできていた評価手法から観点別評価に切り替えるのは簡単ではなく，現時点でも戸惑っている教員が多くいるのではなかろうかと思っています。私見では，評価の在り方が大きく変わらざるを得ないこの機会に，評価と直接に連動する授業の在り方，授業改善の取り組みが，大きく進展することを期待したいと思っています。

　と同時に，評価の水準・・観点別評価のA・B・Cの捉え方，評定の5・4・3・2・1の捉え方についても，例えば，評価Ｂの意義など，捉え直してみる機会になるのではなかろうかと思っています。

◇　学習評価・評定の公式の記録簿となる「高等学校学習指導要録」の記録の仕方については，おおむね，次のような内容が示されています。（特別支援学校高等部も基本的に同様）

**【高等学校生徒指導要録】 （各教科・科目の学習の記録）**

**Ⅰ 観点別学習状況**

**学習指導要領に示す各教科・科目の目標に基づき，学校が生徒や地域の実態に即して定めた当該教科・科目の目標や内容に照らして，その実現状況を観点ごとに評価し記入する。その際，**

 **「十分満足できる」状況と判断されるもの：Ａ**

 **「おおむね満足できる」状況と判断されるもの：Ｂ**

 **「努力を要する」状況と判断されるもの：Ｃ**

 **のように区別して評価を記入する。**

**Ⅱ　評定**

**各教科・科目の評定は，学習指導要領等に示す各教科・科目の目標に基づき，学校が生徒や地域の実態に即して定めた当該教科・科目の目標や内容に照らし，その実現状況を総括的に評価して，**

**「十分満足できるもののうち，特に程度が高い」状況と判断されるもの：5**

**「十分満足できる」状況と判断されるもの：4**

**「おおむね満足できる」状況と判断されるもの：3**

**「努力を要する」状況と判断されるもの：2**

**「努力を要すると判断されるもののうち，特に程度が低い」状況と判断されるもの：1**

**のように区別して評価を記入する。**

◇　教科・科目の評価・評定を行う際の前提事項は，特に留意が必要であり，大事なことだと思っています。

**〔１〕学習指導要領（等）に示す各教科・科目の目標に基づいていること。**

**〔２〕学校が生徒や地域の実態に即して定めた当該教科・科目の目標や内容に基づいていること。**

　重ねて留意が必要なのは，〔２〕の要件が，小学校・中学校においては明示されていなくて，高等学校における評価・評定に関わって明示されていることだと思っています。全国的に同じ内容・程度の教育の実現を目指す義務教育段階と，学校ごとに教育課程の違い・特色を有する高等学校における評価・評定の在り方の相違だと思っています。

◇　このことを踏まえると，それぞれの高等学校が，授業の前提として，《自校の生徒や地域の実態に即して定めた当該教科・科目の目標や内容》と《その評価基準》を，予め生徒・保護者に提示しておくことの重要性・必須性が高まるものと思っています。学校としての『マスタールーブリック』や『すべての教科・科目のシラバス』を，事前に，分かりやすく生徒・保護者に提示しておくことが求められていると思っています。

《評価「Ｂ」の意義》

◇　私を含め，私が接してきた教育関係者の多くは，教育の考え方として，「高い目標を設定して，目指すこと，努力することに意義がある」という思いが強くあり，評価の在り方としても，高評価の「A」・「５」に価値を置く傾向・特徴があると思っています。

より高い目標を設定して，粘り強く努力することそのものは，「学びの価値の基本軸」のようなものですが，また，「学びの定着水準として，より高いものに，より大きな価値がある」ということにも妥当性があるのですが，その考え方が強く働き過ぎて，評価「B」「C」の価値を低める意識・捉え方が働くまでの次元になると，それはマズいことだと思っています。

◇　学習指導要領に基づく評価基準と，自校の実態に基づく評価基準を予め設定して，実際に授業等を行い，「単元，題材などのまとまりごとに」評価を行った場合の観点別評価結果の分布の在り方は，多くの学校は「B」が最も多くなると考えるのが妥当だろうと思っています。また，勿論，学校実態に依りますが，評価「A」と「C」がそれに続く割合になるのが，一定数の生徒がいる高等学校現場では通例的なのではなかろうかと思っています。

◇　生徒集団の中で「多数派」と言える評価「B」の標語である《おおむね満足できる状況》という語は，実に含蓄があると思っています。学校として主体（必須の構成要素）である生徒集団の教科・科目の学習の実現状況の「多数派」が，評価「B」《おおむね満足できる状況》であることから敷衍して考えてみると，「総探」「特別活動」の評価についても，評価のルール・手順は定められているものの，それらを含めた学校全体の教育活動・学習活動の実現状況（評価）が，《おおむね満足できる状況》であるとすれば，その意義は大きいと言えると思っています。授業も運動会も文化祭も，担い手（生徒集団）の「多数派（評価「Ｂ」）」がいることで，そもそも成り立っていることと，活力が生まれる源になる要素があることが意義の大きさそのものだと思います。

《さらに広げて考えてみると》

◇　高等学校教育までの教科・科目の学習の「実現状況」の《おおむね満足できる状況》の評価「B」の考え方を，教育活動・学習活動全般からさらに広げて，卒業後の社会人としての仕事を含む「活動」にまで広げて考えてみると《おおむね満足できる状況》という評価「B」の意義は，さらに高まるのではなかろうかと思っています。

【組織の２：６：２の法則】



　組織マネジメント論の中で目にする法則・理論ですが，私自身も

（見方・捉え方にも依りますが），こうした面はしばしばあるように

思っています。〔参照：◇村上のページ★見方・捉え方＞【9】「２：

６：２の法則」〕

この捉え方の中でも，「良く働き，リーダー性を発揮する２割の

人」，逆に「あまり働かない２割の人」に着目する捉え方もあり得

ますし，「普通に働く６割の人（多数派）」が実働的には集団を支

えているという捉え方も，充分に意義ある捉え方になると思って

います。

《「見方・捉え方」として，さらに広げて考えてみると》

◇　こうした《おおむね満足できる状況》の評価「B」の考え方を，人の在り方・生き方などとの関連性としての評価軸（大いなる価値観）にまで広げて考えてみると，その意義がさらに大きくなるような感じがしています。

【社会全体の価値観の変容】

＊　数量的な確認はできていませんが，少し従来的な「他人よりも良く働いて，出世を望む」姿で

はなく，「普通に働いて，自分の時間・家族との時間をより大事にする」姿へと変容しつつある

のでは・・という話題に接することが増えているように思います。

＊　高校の部活動，スポーツに対する捉え方が，「勝利至上主義」と「生涯に亘って楽しむスポー

ツ」とに二極分化しつつあり，長いスパンだと「楽しむスポーツ人口」が拡大するだろうとの見方。

＊　高校の進路指導などにおいて，「将来のことを考えて難関大学に合格すること」と対比的に

「自分がやりたいことに繋がる大学・学部・学科を選ぶ考え方」が，広がりつつあるのではない

か・・という見方。

【個人的な価値観，人生観】

＊　私自身は，小学校時代に体育と音楽の苦手意識が強く，評価も芳しくありませんでした。体

育は幸いにも中学校で一時期，友人に誘われてバスケットボール部に入って1年余り活動した

ことで，試合での選手にまではなりませんでしたが，球技・運動への苦手意識は少なくなり，高

校・大学・教員時代に，ソフトボールやテニス，スキーなどを皆で楽しむことができました。現在

は，ゴルフを楽しんでいて，《おおむね満足できる状況》だと思っています。

＊　音楽は，今も音階などへの対応力もなく，飲み会の後に誘われて行ったカラオケでも歌うこと

はありません。後に「絶対音感」という言葉を知り，しかも，おおむね幼少期に培っておくことが

大事だと見聞きして，自分にはその技量（知識・技能）が極めて乏しいのだと思っています。そ

れでも，現在では，自分の部屋にいてBGMを流したり，好きな歌手の歌を聴いたりすることも

ありますが，自己評価は「C（一部Ｂ）」のままだと思っていて，もう，「努力」もしていません。

＊　同じ技量（知識・技能）に属することだと思いますが，どうも私は「味覚の力」が「高い部類」で

はないことに，１０年くらい前に気付いたように思います。それ以前は，他の人と食事しても，おおむね「美味しい」か，「美味しくない」の捉え方で対応できていましたが，家族での食事の在り方が変わったことで，「味」について話題にすることが増え，私の「味覚の力」は，おおむね評価「Ｂ」と「Ｃ」の２観点でしかないと理解できました。

　その後，機会があり，日本酒の利き酒をしても，一番値段の高いお酒とその次の位置のお酒とを区別できる力はないことを理解しました。ただ，こうした領域については，評価「Ｂ」の力で，美味しいと思って食べられる食事・食材があまり高価ではないという現実面も含めて，《おおむね満足できる状況》で充分だと思っています。

＊　実は，今日の日付は，私が「古希を迎えた日」になります。この年齢になると，命や日常性があ

ることの大事さや自分の人生全体のことなどを振り返ったりすることも増えてきていて，ついつ

い，自分としての納得感，満足感，手応え感などについての「自己評価」を思ってみたりもします。自分なりの「実現状況・達成状況」について，現在，継続進行中の努力や楽しみも含めて，《おおむね満足できる状況》の評価「B」の考え方の意義深さに思いを深くしています。

《まとめ的に》

◇　評価「Ｂ」の捉え方・意義について，私なりの見方・捉え方を文字にしてみましたが，この見方・捉え方は，高校の学校現場における教育・学びの考え方として，評価「Ｃ・Ｂ」の生徒の学び・授業が評価「Ｂ・Ａ」を目指すこと，目指して努力することを軽んじている意図はなく，また，評価「Ａ」の生徒の学び・授業が，「より高きを目指す」ことを軽んじる意図もありません。それぞれの学びの「実現状況」を評価する意義は，その評価が，学びや授業の在り方を工夫・改善して「より高きを目指す」ことに繋げるためのものであるという「評価の鉄則」が基本であること，そして，そのことが，まさに《生涯に亘っての努力・工夫・改善》に繋がる見方・捉え方だと，強く思っています。